

平和の計画

吉 岡 康 子

エレミヤ書 29章 4～14節

フィリピの信徒への手紙 3章 7～21節

来年2021年のカレンダーや手帳が目につくようになり、来年のスケジュールに書き込みをすることが多くなりましたが、その時、果たしてこれが本当にこの予定通りに行くのかはわからないとの？や代案を同時に書き込むということをしづるを得ない日々を私たちは生きています。思えば今年ほどカレンダーに書き込んであった予定に「中止」とか「延期」とか「オンライン」と書き込んだ年はなかったと思います。去年の今頃に立てていた今年の予定・計画はある意味全て計画通りに進みませんでした。来年がどうなるかもわかりません。

そのような毎日に生きる私たちに神はエレミヤを通して今日確かに語りかけておられます。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば見いだし、心を尽くしてわたしを求めるなら、わたしに出会うであろう」(エレミヤ書29：11～14a)

時は、ユダの人々にとって最大の危機、「バビロン捕囚」の真っ只中でありました。決して滅びることはないと思っていた都エルサレムが打ち壊され、彼らの拠り所であったエルサレム神殿が破壊されたのです。それだけでなくユダの人々は3つのグループに分断されます。被災し廃虚となった国に取り残される人々、大国エジプトに逃げていく人々、そしてバビロン王ネブカドネツアル

によってバビロンに捕虜として強制連行された人々です。彼らはバビロンのケバル川沿いに住まわされます。猛烈な暑さと湿度の地で、マラリヤなどの感染症に悩まされる過酷な場所でした。これはユダヤの共同体を分離し弱体化させる政策であったのです。そのようなまさに「わざわい」の中にあり、これから先このわざわいがいつまで続くのかとの絶望的な思いの中にいる人々に神は「わたしがあなたのために立てている計画は災いの計画ではない、それは平和の計画であって、将来と希望を与えるものである」と言われるのです。大事なのは私たちの計画ではないのです。もちろん計画を立ててそれ通りに実行していくのは良いことです。日本人は「段取り」が上手と言われます。きちんと計画を建て、段取りをしてそれを実行していくことが得意と言えるかも知れません。計画通りに行かないとイライラします。非難が起きます。しかし、この年の私たちの計画を全て崩していく大きな試練のなかでわたしたちは立ち止まらざるを得なくなりました。これからの計画も立てにくい状況です。どのような予定、プログラムにも「新型コロナウイルス感染拡大の状況によっては計画変更・中止致します」と当たり前のように書かれていることを既に当たり前を受け止めてはならない。このような状況の中で、本当に大事で、本当に確かなものは何かが見えてきます。

バビロンに強制連行されて過酷な地で厳しい環境、感染症、数々の苦難に怯え、嘆いていた人々が「あなたたちの明日は私の手の中にある。災いの計画ではなく、平和の計画であり、将来と希望がある」との神の声を聞いた時、ユダの人々はそれまで打ちひしがれていたところから立ち上がりました。彼らは神への信仰をあらたにして、神殿がない中で、シナゴーク、つまり彼らの生きる地域で、集まれる人々が何とかして集まって礼拝を再開します。神殿が失われて何もかも失われたように思えても、彼らには何世紀もの間受け継がれてきた讃美があり、祈りがあり、信仰の先輩たちの歩みの証しがあったのです。礼拝によって困難の中にあっても彼らの前に進む情熱はかき立てられました。

この時エレミヤはすぐにこの厳しい、過酷な状態は解決する訳ではないということも語ります。明日になれば、来年になれば、事態は一転してまさに「劇

的に効くワクチン」のようなものが開発されて全てがすっきりと元どおりになるというのではないのです。それどころか29章の10節には「70年」という時が書かれています。「主はこう言われる。バビロンに70年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。」(10節) 70年というのは当時の人の一生を指すとも言われています。長い年月です。それもその年月、自分たちを散々な目に合わせているバビロンの人々と戦って生き残れというのではなく、「家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい」(5節)と言われ、さらには「わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。」(7節)と言われます。

最悪と思われる状況、環境において平安、祝福を祈りつつ生き抜きなさいと励まされるのです。ユダヤの民は祖先、信仰の先達から「祝福」を受け継いできました。祝福されたものとして生きてきたのです。そしてこの祝福は個人が抱え込むものではなく、常に分かち合い、「共に恵みに預かる」べきものであると主は言われるのです。

今自分たちを苦しめているバビロンの人々のために祈るということを通して、主イエス・キリストが示された「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」(ルカ福音書6:27・28) この平和の道へと続く扉が開かれているのです。敵対、排除、孤立ではなく、共に生きる、共に恵みに預かることをとおして私たちは前に進むことができます。

やがてバビロンが滅んだ後に、バビロンで辛酸をなめた人々は故郷エルサレムへと帰り、荒れ果てた街を復興するために働きます。その復興の力の源となったのがこのバビロンでの苦難の日々と、そこで燃え上がった神への信仰の情熱でした。そしてさらにはエレミヤが31章で語る「新しい契約」の実現としての主イエス・キリストの御降誕へと「平和の計画」は進行し、祝福は受け継がれていきます。そして、この主イエスのご降誕を祝い、救い主を礼拝するた

めに、はるばる旅をしてきた「東方の学者たち」、「三人の博士たち」と言われる人々は、バビロンの末裔であったとも言われています。バビロン捕囚の時代に強制連行されてきた人々の信仰が細々と受け継がれていたのかもしれませんが、バビロン捕囚が解かれてもエルサレムに帰れなかった、帰らなかった人々たちによって伝えられていた救い主・メシアへの信仰が時を経てバビロンの地に生きていた彼らを動かして、救い主を礼拝するための冒険ともいえる旅に出発させたのです。

今日私たちに与えられた新約聖書のテキスト、フィリピの信徒への手紙は、使徒パウロのラスト・メッセージ、遺言ともいえる手紙です。牢獄に囚われているということでは、エレミヤの時代のバビロン捕囚と同じです。苦しい状況です。明日引き出されて処刑されてもおかしくない恐怖もあるでしょう。しかし、このフィリピの教会の日々へ送った手紙、「メール」は「喜びの手紙」と言われている明るさに満ちたメッセージです。3章の冒頭にも「主において喜びなさい!」と呼び掛けられています。そして13節にこうあります。「兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」3章の前半に彼自身が描いている様に、彼はかつて多くのものを持っていた人でした。主イエスに出会い、いや主イエスが彼に出会ってくださり、回心を経験して、キリストのために闘う宣教の働きに邁進してからも大きな働きをしてきた人でした。しかし、彼は、過去は過去として、さらに先に進もうとして居るのです。囚われて、前進どころか身動きさえとれず、明日、命が断たれかもしれないという状況においても、前に、神を見上げて、進もうとするのです。まさに若々しく全身全霊をかけて進んでいくのです。彼もまた自分の明日は神の平和の計画のうちに進んでいると信じて、将来と希望を持って喜びと感謝に溢れて居るのです。そして自分に与えられている祝福を最後の最後まで、人々に分かち合うために励んでいるのです。

今のわたしたちの日々もまた神の立ててくださった平和の計画のうちに重ね

られているのです。決して災いの計画ではありません。私たちの恐れや不安を超えて神が開いてくださる将来と希望のうちに私たちは確かに生かされているのです。私たち一人一人のために主なる神さまが特別に立ててくださっている平和の計画を信じましょう。共に喜びと希望と感謝を持って進み行くものでありたいと心から願います。

祈ります。

(2020年10月18日 日本基督教団吉祥寺教会聖日礼拝説教

当時は感染拡大防止のため礼拝人数を制限し、礼拝時間短縮、
オンラインライブと説教原稿事前送付を行っていた。

なお吉祥寺教会は聖日礼拝に説教題は付けない。今回掲載にあたって題は付けられた。)